

指方立相ノート

2023/05/17 論題を味わう勉強会 名古屋別院 山上正尊案

（おつとめ） 小経	1
（過去の提要と判決） 昭和11年度	2
昭和61年度	4
平成22年度	6
平成11年度	9
（今年の提要） 2023（令和5）年度 提要	12

会読案 出拠	13
--------	----

釈名	14
----	----

義相 一、浄土三部経に「西方」と説く意義	15
----------------------	----

二、浄土建立の意義	17
-----------	----

三、辺即無辺、相即無相の浄土	19
----------------	----

【参考】『論註』 法界身・入一切衆生心中・是心作仏是心是仏 20

四、無相離念と立相住心	22
-------------	----

諸師の無相離念 22

善導大師の立相住心 23

「定善義」 法界身の釈名 23

「定善義」 入一切衆生心中と真身觀三縁との関係 24

「化身土卷」 觀門の扱ふ 26

（おつとめ） 小經

爾時佛告長老舍利弗、
從是西方過十萬億佛土有世界、名曰極樂。
其土有佛、號阿彌陀。

今現在說法。

舍利弗、彼土何故名爲極樂。

其國衆生、無有衆苦、但受諸樂。故名極樂。

南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏

南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏

南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏

願以此功德 平等施一切

同發菩提心 往生安樂國

（過去の提要と判決） 昭和二十年度

資料提供 井上敬信さん

綜 理…湯次 了榮 勸学

本講師…梅原 真隆 勸学 講題…『

典 義…増山 顕珠 司教

論題提要

○指方立相

【題意】

彌陀淨土の方処如何を論究せんとするにあり。従つてまた極樂の莊嚴相にも論及する所あるべし。

【論点】

- （一）先づ指方立相といふ言葉の出據及びその意義を明らかにし、次に正しく淨土の方處を示したまへる經釋の明文を示せ。
- （二）西方及び十萬億土の意義如何。また七寶樹林等の淨土の莊嚴相の意義如何。
- （三）淨土論の究竟如虚空廣大無邊際、及び安樂集の境次相接の文意如何。

○指方立相

此の論題は當世の人の屢々疑問として提出する所なるが故に敎家としては 之に對して現代人として充分に首肯せしむるに足る解答を用意せざるべからず。

先づ指方立相なる熟語は何れの聖敎に出づるや、此の言葉の持つ本來の意義如何を明らかにし置く必要あり。

次に正しく淨土の方處及び莊嚴相を示したまへる經釋の明文を列舉せざるべからず。此の點に關しては勿論宗祖及び蓮師が聖敎の上に如何に示したまふてあるかをも窺はざるべからず。

次に西方とは何時何所から何を標準として何れの方角を指して西方といひしものなりや、西方とは如何なる意味なりや。また彌陀如來は何故に殊に西方に淨土を建立したまひしや。

十萬億土とは如何なる計數によるものなりや、またその意義如何。また自然懈慢界の所在とも關連して論ぜらるゝに至るべし。

淨土の莊嚴相に就ても世人の種々理解し難き點あるべし、例せば七寶樹林の如き、金銀等の七寶によつて成れる樹林とは如何なる樹林なりや、恐らく世人の理解し難き所なるべし、之は單なる形容又は象徴なりと理解して差支へなきや、若し爾らば大經の他の何れの文も若し理解し難き點あるときは適當にその意義を酌んで解釋するも差支へなしとするや、こゝにも重要な研究論點あるべし。

西方十萬億土の淨土といへば邊際あるが如し、然るに淨土論には究竟如虚空廣大無邊際と曰ふ、二者の間相違するには非ざるか、如何に理解してよろしきや。

安樂集に境次相接と云へる意義如何、彼の文と西方十萬億土と如何に調和さるべきや。

「指方立相」判決

◎指方立相 七月十九日

(一)言葉の出據。指方立相の語の出據は定善義「廿四丁」又今此觀門等唯指方立相住心而取境文其他類文は論者の指示にて可である。

(二)言葉の意義。指方立相は指示方處、辨立相状にして釋尊が極樂の方處を西方なりと指示し三種莊嚴を辨立せられたものであるこれが定善義の當面の義意である。而して釋尊の指示辨立の根底には弥陀の指定西方建立相状の義意は存するのである安樂集下「十四丁」於時法藏願取西方、成佛今現在彼文これである。蓋し弥陀の誓願は凡夫を正所被としたまふ故に憶念し易きやうに示されたものである。

(三)淨土の方處。淨土の方處を示したまへる經釋の明文は、經文にては大經上卷「二十二丁」今已成佛現在西方小經にては從是西方過十万億佛土有世界名曰極樂文釋文にては定善義「二十丁」即向靜處面向西方、法事讀下「四丁」如來別指西方國、禮讚「廿八丁」在西時現小、安樂集下「十五丁」是故法藏菩薩願成佛在西悲接衆生文此等の聖文に依つて淨土の方處が西方であることが知られる。

(四)西方の意義。西方は上に述べたるが如く方處を指すもので東西南北の西方を指すものである。換言すれば萬人の知悉する西方を指したものである。西方を象徴と解して五行に配し五方に配する如きは今は取らない如何となれば西方を象徴化する如きは一文不知の凡愚に適させるのである。西方は從是西方とあるが如く吾等所住の閻浮提を基点として指示せるもの從つて當時の世間悉檀たる須弥山説に於て談したものである、從つて地動説を以つて直ちに須弥山説に會釋せんとする如きは妥當ではない。然らば地動説の常識に養はれたるものが須弥山説の從是西方を如何に理解すべきかそれは安樂集下「十五丁」已下に示すが如く日沒處といふ地理的指示に即して心理的方處を味う可きである。禮讚「四丁」須面向西方者最勝如樹先傾倒必隨曲故必有事得不及向西方但作向西想亦得とあり此文の意である。

(五)十万億土の意。十万億土といふは遠しといふ意味に非ずして近しといふ意である、從つて十万億佛土は釈迦所化の國土を象徴するもので、即ち梵網經の蓮華藏世界を意味するものである。安樂集の境次相接は單に境界相接とのみ局限せず境域相接と解すも可で所謂去此不遠の意である。十万億といふは最再たる凡夫の数的觀念を以てせは驚嘆すべき数字なれども全法界を達觀したまふ聖者の数的觀念にては近距離を示すものと知るべきである。

(六)七宝樹林等淨土の莊嚴相の意義。一言にして覆へば聖なる宗教的價値の表現で、凡愚に理解し易からしめんが爲に凡愚の尊重する價値意識を通して表現したまふたもので全く如來善巧の表現である。小經に極樂の宝鳥を説きて汝勿謂此鳥、實是罪報所生と戒め阿弥陀佛欲令法音宣流變化所作と顯示したまふこの御指示に基きて莊嚴相を理解す可きである。

(七)有辺と無辺。淨土は真空妙有の實在で廣略相入の妙境界である、是を真空の側よりすれば略内一法句で、あらゆる相とあらゆる辺のまゝ即ち無相无边である。是を妙有の側よりすれば三種莊嚴をそなへたる有相の淨土、この有相の淨土は辺即无边、无边即辺の妙境界にして即ち有辺の側よりすれば禮讚に在西示現小と釈したまふ如く、これを无边の側よりすれば淨土論に廣大无边際と釋したまふが如くである。因みに淨土と娑婆との對立を窺ふ如きは在西示現小の立場に於てすべく、無相无边の一法句有相无边の淨土觀に於てこれを検討することは妥當でない。

(八)宗指方立相を強調せざる理由。一は往生淨土の実踐法の展開に關係し、二は往生即成佛の教義を闡明すること、三は報土に眞假を分別すること第一は善導は往生のために願行を重視

し凡夫の願生の對境とし思想し憶念しやすき指方立相の浄土を重視せられたのである、高祖は欲生中心の願行を展開して信樂中心の信心を高調し願は信の義別として統収し現前の名號を信受する處自ら浄土を要期する願のあることを示されたのである。第二は聖人は念佛往生の教義を承けて念佛成佛の教義を展開せられたのである。證卷眞佛土卷にはその意を中心として示されたのである。第三は唯指方立相を強調するときは眞假の分別が混乱する恐れがあるから報土中に眞土と化土とがあつて化土にはあらず無量光明土の眞実報土であることを示すそれ故指方立相を強調せなかつたのである。

以上

昭和9年度

綜 理…瓜生津隆雄 勸学

本講師…武内 紹晃 勸学

講題…『無量寿経優婆提舍願生偈』

典 議…秀野 大衍 司教

会読論題提要

(四)指方立相

一、題意

阿弥陀仏の浄土の方処を西方と指し、浄土の莊嚴相を立てられた意義を明らかにする。

二、出拠

「定善義」その他

三、釈名

指方立相の名義

四、義相

(一)浄土建立の意義

(二)無相離念と立相住心

(三)辺即無辺と相即無相

(四)の論題の所顯

「指方立相」判決

(一)題意

浄土の方処を西方と指し、三嚴二十九種の莊嚴相を立てられたことをとおして、阿弥陀仏の浄土の意義を明らかにする。

(二)出拠

まず名目の明らかな出拠をあげれば、『觀經疏』「定善義」像觀の釈(『真聖全』一・五一九)に

今此觀門、等唯指方立相住心而取境。總不明無相離念也。如来懸知末代罪濁凡夫立相住心尚不能得。何況離相而求事者、如似無術通人居空立舍也。

と示されている。また『法事讚』(二・五六七)には『大經』の「現在西方去此十萬億刹」(『真聖』三四、『真聖全』一・一一五)と説かれたものによって「直指西方十萬億刹」といわれ、

また『小経』に「従是西方過十萬億仏土」（二五〇・二・六七）と説かれたものによって「如来別指西方国」（二・五八九）とのべられている。

（三）釈名

釈尊に約していえば、「指」は指示、「方」は方処、「立」は弁立、「相」は相状をいい、釈尊が「西方」という方処を指して、極楽の莊嚴相を教示されていることをいう。また、阿弥陀仏に約せば、「指」は指定、「方」とは方処、「立」は建立、「相」は相状と見られる。即ち阿弥陀仏が、娑婆からいつて西方という方処を指定して、極楽世界を建立されたことをいう。なお、「定善義」の像観の文の当分は、釈尊に約して指方立相を語られているが、『安樂集』（一・四二六）に「法蔵菩薩願取西方成仏今現在彼」といわれたものは、弥陀に約して語るものといえよう。

（四）義相

（イ）無相離念と立相住心

「定善義」像観の釈（一・五一八）によれば、当時、撰論宗等の諸師は、『観経』所説の法界身を法身とみ、その教説を、唯識法身観とか、自性清淨仏性観といった無相離念の観法を明すものとみなしていた。それに対して、善導大師は『観経』の観門は、末代罪濁の凡夫の為に説かれたものであるから、西方に莊嚴成就された有相の浄土を観ずる事観を説くものであって、決して無相離念の理観を明すものではないとして、指方立相という語を用いられたのである。このように指方立相という用語は、観門から建てられたものであるが、その義は広く、阿弥陀仏の浄土の性格をあらわす言葉として用いられているのである。

そのことを『法事讃』（二・五八九）に、『大経』や『小経』の「従是西方」の文を釈して一切仏土皆嚴淨、凡夫乱想恐難生。

如来別指西方国。従是超過十萬億。七宝莊嚴最為勝。

といい、釈尊は常に西方という方処を指定して、浄土の莊嚴相を説かれているといわれたものが、その意をあらわしている。いいかえれば、阿弥陀仏の浄土は、一般に指方立相という説き方がなされているというのである。このように西方という一定の方処をさして、七宝莊嚴の有相の浄土として説かれたのは、後に述べるように、阿弥陀仏の浄土は、本来、辺即無辺、無辺即辺の浄土であるが、有相に執ずる凡夫の情に应じて、無辺を全うじた辺の側で应じられるからである。

このことを『礼讃』（二・六七〇）には

已成窮理聖真有徧空威在西時現小但是暫隨機

といわれたのである。即ち真如法性を全顯して、虚空に遍満するような、無辺の徳を成就された阿弥陀仏は、有相に執ずる凡夫を救う為に、無辺を全うじた有辺有相の側で機に应ぜられるというのである。ここに言われる「現小」とは、有相有辺を示現することであり、「暫」とは、「暫用還廢」の義ではなく、根本無分別智に対する、無分別後得智の義意をあらわしている。

（ロ）辺無辺不二

『大経』や『小経』には、「従是西方」と方処を限定して浄土を説かれているが、『浄土論』には量功徳を明して「究竟如虚空 廣大無辺際」と、浄土を無辺際と説かれている。この経と論との浄土の説相の相違は、本来浄土は、辺即無辺、無辺即辺なるありようをしているところからくるのである。

このことを『論註』浄入願心章(二・三三六)には、広略相入をもって明されている。即ち浄土は真如法性を、大悲の願行をもって全性修起した世界である。その法性の側を略門平等とよび、修徳顕現せられた事相の莊嚴相を広門という。仏身でいえば、前者を法性法身、後者を方便法身といわれている。即ち法性法身(略門)によって方便法身(広門)が成立し、方便法身(広門)によって法性法身の徳が具現するという。由生由出の關係にあるのである。それゆえ、法性と方便、略門と広門は不一不異であって縦の前後でなく横に相即している。かくて浄土は、広略相入して、辺無辺不二なる第一義諦妙境界相であるといわれるのである。このような如来浄土のあり方を宗祖は『唯信鈔文意』(八〇三・二一六三〇)に

この一如よりかたちをあらはして方便法身とまうす、その御すがたに法蔵比丘となりのたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり(中略)この如来すなはち誓願の業因にむくいたまひて報身如来とまうすなり、すなはち阿弥陀如来とまうすなり。

といい、有辺有相の如来・浄土は、衆生を摂取する為に一如たる法性法身が垂名示現されたすがたであるといわれたのである。

すなわち無辺を全うじて辺を示現し、無相を全うじて相を示現するのは、有相の執を離れることのできない凡夫を招引する為である。このように仏は、無辺を全うじた辺の側で、衆生に応じて願生をよびかけ、衆生は、有辺の浄土を願生し、浄土に往生すれば、自然に辺即無辺に契わしめられるのである。

(ハ)この論題の所顕

『大経』や『小経』に西方に七宝をもって莊嚴された極楽浄土ありと説かれたことを、単なる「たとえ話」の如く受け取られる嫌いがある。しかし『論』『論註』に明らかに告示し頂いたように、根本無分別智たる法性法身から示現せられた方便法身、即ち、無分別後得智の世界として、清浄世間智の行境であり、まさに、真実功德の顕現態であることを示すものである。

平成5年度

綜 理…赤山 得誓 勧学

本講師…仲尾 俊博 勧学

講題…『観経玄義分』

典 議…山田 行雄 司教

会読論題提要

二、指方立相

〔題意〕

阿弥陀仏とその浄土について、經典に説かれる西方の意義と浄土の相の説意をうかがい、浄土教の本義を明らかにする

〔出拠〕

『定善義』『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』『安樂集』

〔釈名〕

〔指〕「方」「立」「相」

〔論点〕

①西方の意義

②過十万億仏土の問題

- ③ 仏国土の表現
- ④ 浄土建立の意義
- ⑤ 無相離念と立相住心

「指方立相」判決

一、題意

阿弥陀仏とその浄土について、經典に説かれる西方の意義と浄土の相の説意をうかがい、浄土教の本義を明らかにする。

二、出拠

- ① 『定善義』
- ② 『無量寿経』
- ③ 『観無量寿経』
- ④ 『阿弥陀経』
- ⑤ 『安楽集』 等

三、釈名

指方立相の釈名については、釈尊と阿弥陀仏との立場によって異なる。釈尊に約せば、「指」とは指示、「方」とは方処、「立」とは弁立、「相」とは相状である。すなわち、釈尊が西方という方処を指示して、阿弥陀仏の浄土の莊嚴相を教示されていることをいう。次に阿弥陀仏に約せば、「指」とは指定、「方」とは方処、「立」とは建立、「相」とは相状である。すなわち、阿弥陀仏が、此土からいつて西方という方処を指定されて浄土を建立されたということを用いる。

そこで、『定善義』像觀の「等唯指方立相住心而取境云々」の文は、釈尊に約して指方立相が語られてあり、『安楽集』に『大經』の法藏発願の文を取意するなか、「法藏菩薩願取西方成仏、今現在彼」とあるのは、弥陀に約して語られているのである。

四、義相

(一) 西方の意義について

ここでいう「西方」とは、東西南北四維中の西方であつて、方処を指すのである。浄土は『阿弥陀経』に「從是西方」とあるごとく、閻浮提を基点とし指示したものであり、須弥山説によつて論じられたものである。よつて天動説による立場である。しかし地動説を常識とする現代人にとつて、從是西方をいかに理解すべきだろうか。この問題は『安楽集』に「以閻浮提云日出處名生沒處名死、…中略…是故法藏菩薩願成仏在西悲接衆生」とあるごとく、日の没する処という地理的方処に即して、宗教的方処と理解すべきである。『往生礼讃』前序に「須面向西方者最勝、如樹先傾倒必隨曲、故必有事礙不及向西方、但作向西想亦得。」とあるが、この文は西方を宗教的に受け止めることを教示しているのである。

しかるに、『浄土論』には浄土について「究竟如虚空广大無邊際」とある。また『論註』には「此浄土隨順法性不乖法本」とある。すなわち、阿弥陀仏の浄土は無相無辺と説くのである。ここに浄土について、無相無辺と西方の莊嚴国土との問題がある。換言すれば、真如法性と願心莊嚴の関係である。『論註』は、この問題について、真如法性を略とし、願心莊嚴(三嚴二十

九種)を広として、広略相入を語るのである。その説明として、『論註』は略を法性法身とし、広を方便法身として、いわゆる由生由出、不一不異と示すのである。この釈義は、法性法身と方便法身は豎の前後でなく、横の相即を語らんとするものである。これを思うに、浄土は、無方即方、方即無方であり、無相即相、相即無相である。

ただし、方即無方、相即無相の知見は、悟りの世界の所見であり、迷界の衆生においては、但方・但相である。この迷界の衆生の但方・但相の迷見に対して、方即無方の方と、相即無相の相で応じるのが指方立相の立場である。よって衆生が但方・但相の迷見でもって、西方浄土に願生しても、その方・相が、方即無方であり、相即無相の方・相であるから、無量光明土への往生ができるのである。この論理を語るのが『論註』の氷上燃火の釈であろう。

(二)過十萬億仏土の問題

『大經』には阿弥陀仏の浄土について「去此十萬億刹」とあり、『小經』には「過十萬億仏土」等とある。だが『觀經』には、「去此不遠」といつてある。『大經』『觀經』には數量を示しているのは、浄土と娑婆世界の隔歴をいわんとしたものである。また十萬億仏とは、釈尊全身の教化の世界であるとの説もある。

『觀經』の「去此不遠」については、「序分義」に三義を出してある。第一義は分齊についていうのである。十萬億仏土といえば凡夫は遠き思いを持つが、無邊際の仏事と対比すれば遠からずであるという。第二義は距離的に遠いというが、往生する時間は一念の時であり、屈伸臂頃であり、時間的に遠からずであるという。第三義は、浄土は觀見可能な所であるから遠からずと示すのである。因に、第一義は『大經』『小經』により、第二義は『觀經』散善により、第三義は『觀經』定善の立場よりの解釈である。

「過十萬億仏土」の「過」は超過の義と通過の義があるが、いずれも此土に対する彼土を指すのである。

(三)仏国土の表現

阿弥陀仏の国土の表現については諸の經論釈に種々説くところである。『大經』は『安樂』、『觀經』・『小經』は「極樂」の語が多い。しかるに宗祖の聖教の上に、宗祖の言葉としては「極樂」の語を見るのは僅かである。むしろ、意識的に使用されなかった感がある。その理由を窺うに、『小經』に「極樂」を解釈して「彼土何故名為極樂、其國衆生、無有衆苦、但受諸樂、故名極樂」とある。當時の人々のなかには、「諸の樂のみを受く」とあるのを誤解して、自己の欲望の充足の可能な世界として浄土願生の思いを持ったのではなからうか。宗祖はこの非と、またそのような誤解をされぬためであろう。『真仏土卷』には「謹按真仏土者、仏者則是不思議光如來、土者亦是無量光明土也。」といい切つてあるところを思念すべきである。

(四)浄土建立の意義について

『大經』に法蔵菩薩の願心を述べて「令我於世速成正覺、拔諸生死勤苦之本」とあるが、その願心の具体的発動が浄土建立である。このことについて、『安樂集』は、「為欲成就衆生故願取仏國」といい、また「法蔵菩薩願成仏在西悲接衆生」という。浄土建立の意義は、まさに衆生を成仏せしめんためである。

(五)無相離念と立相住心について

「定善義」第八像觀の釈義によれば、その当時の諸師は『觀經』所説の法界身を法身とみて、その經説を「唯識法身觀」の立場より、または「自性清淨仏性觀」の立場よりこれを解釈して、『觀經』の觀法を無相離念の理觀を説くものとみなした。これに対して善導大師は、『觀經』所説の觀門は末代罪濁の凡夫を對機としていたのであり、西方に莊嚴成就された有相の淨土を觀察する事觀であるとされるのである。すなわち、無相離念の理觀に對して立相住心の事觀を述べるのに指方立相の語を用いたのである。よって指方立相の語が直接に出されるところは觀門についてであるが、その義は広く阿弥陀仏の淨土の特色を表す言葉として用いられているのである。

指方立相の淨土こそ、凡夫の成仏のための世界である。このことを『法事讃』には、「一切仏土皆嚴淨、凡夫乱想恐難生。如来別指西方国、從是超過十万億、七宝莊嚴最為勝。」とある。

要するに、指方立相の阿弥陀仏の淨土こそ、大乘仏教の究極態として、大乘空の必然的展開としての真空妙有の世界である。西方有相の淨土が底級であったり、または否定して、淨土は、真如・一如・空の世界であると言い切れることは、真如や空の眞實義を誤解するものである。以上

平成27年度

綜 理…普賢 晃壽 勸学

本講師…渡辺 隆生 勸学 講題…『安樂集』

典 議…中西 智海 司教

会説論題提要

一、指方立相

〔題意〕

阿弥陀仏の「淨土」について、經典に説かれる西方の意義と、淨土の莊嚴相を立てられた説意を明らかにする。

〔出拠〕

①『定善義』

②『無量寿經』

③『觀無量寿經』

④『阿弥陀經』

⑤『安樂集』など

〔釈名〕

〔指〕「方」「立」「相」

〔義相〕

①西方の意義

②過十万億佛土の問題

③仏国土の表現

④淨土建立の意義

⑤無相離念と立相住心

「指方立相」判決

〔題意〕

阿弥陀仏の浄土が西方にあると説かれた意義をうかがい、浄土の莊嚴相をたてられた説意を明らかにする。

〔出拠〕

『定善義』（『真聖全』一・五一九頁）

「今此觀門、等唯指方立相、住心而取境。總不明無相離念」

『仏説無量寿經』（『真聖全』一・一五頁）

「法藏菩薩、今已成仏、現在西方。去此十万億刹。其仏世界、名曰安樂。」

その他

『仏説觀無量寿經』

『仏説阿弥陀經』

『安樂集』

『法事讃』等がある。

〔釈名〕

釈尊に約していえば、「指」は指示、「方」は方処、「立」は弁立、「相」は相状をいい、釈尊が「西方」という方処を指して阿弥陀仏の浄土の莊嚴相を教示されていることをいう。

また、阿弥陀仏に約すれば、「指」は指定、「方」は方処、「立」は建立、「相」は相状である。すなわち、阿弥陀仏は此土からいつて西方という方処を指定されて浄土を建立されたことをいう。

そこで、『定善義』像觀の「等唯指方立相、住心而取境。」の文は、釈尊に約して指方立相が語られており、『安樂集』に「法藏菩薩願取西方成仏今現在彼。」とあるのは、弥陀に約して語るものといえよう。

〔義相〕

（一）西方の意義

ここでいう「西方」とは、東西南北四維中の西方であって、方処を指すのである。阿弥陀仏の浄土は『仏説阿弥陀經』に「從是西方」とあるように此土を基点として指示したものであり、須弥山説によって論じられたものである。従つて天動説による立場である。しかし、地動説を常識とする現代の人にとって、從是西方をいかに理解すべきであろうか。

これについて『安樂集』に「以閻浮提云日出処名生没処死…中略…是故法藏菩薩願成仏在西悲接衆生。」とあるように、日の没する処という地理的方処に即して、宗教の領域としての方処と領解すべきである。『往生礼讃』「前序」にある「須面向西方者最勝、如樹先傾倒必隨曲、故必有事礙不及向西方、但作向西想亦得。」との文は、西方を宗教的に受けとめることを教示しているのである。

ところで『浄土論』には浄土について「究竟如虚空广大無辺際」とあり、『論註』には「此浄土随順法性不乖法本」と説かれている。これによると、阿弥陀仏の浄土は無相無辺と説くのである。それでは無相無辺と、西方の莊嚴国土とはどのように理解すべきなのであるか。云いかえれば、真如法性と願心莊嚴の關係を、どう領解すべきかということである。これについて『論註』は真如法性を略とし、願心莊嚴を広として広略相入の論理を展開している。その説明として、『論註』は略を法性法身とし、広を方便法身として、いわゆる由生由出、不一不異

と示すのである。このことを思惟すると、浄土は無方即方、方即無方であり、無相即相、相即無相であるといわれるのである。

ただ、方即無方・相即無相の知見は、悟りの世界の所見である。そこでこの迷界の衆生に対して、方即無方の方と、相即無相の相で応じるのが指方立相の立場なのである。

従って、衆生においては西方浄土に願生するのであるが、如來の本願力により、無生の生の浄土、無量光明土へ証入せしめられるのである。この論理を言いあてているのが、いわゆる論註の氷上燃火の積なのである。

（二）過十萬億仏土の問題

『大經』には阿弥陀仏の浄土について「去此十萬億刹」といわれ、『小經』には「過十萬億仏土」とある。しかし『觀經』には「去此不遠」と説かれている。

『觀經』の「去此不遠」については、「序分義」に三義をあげて解釈されている。

①分齊不遠…無辺際領域からみれば近い。

②一念即到…距離的には遠いと思うが、往生するときは本願力によるが故に一念に往生することが出来る。

③觀念即現…浄土はそれを觀する者の心相に常に顯現するから遠くない。

ちなみに、①は『大經』、『小經』により、②は『觀經』『散善義』により、③は『觀經』『定善の立場よりの領解である。

「過十萬億仏土」の「過」は超過（勝過）と經過の義がある。いずれも此土に対する彼土を指すことを留意すべきである。

（三）仏国土の表現

阿弥陀仏の国土の表現については、經論釈に種々に説かれている。『大經』は『安樂』と、『安養』と、『觀經』・『小經』には「極樂」の語が多い。

ところで、宗祖の聖教の上に見える、宗祖の言葉としては「極樂」の語は僅かである。そのことは「諸の樂のみを受く」とあるのを、自己の欲望を満たす世界への往生ととる誤解を誡められたことである。「真仏土卷」に、「謹按真仏土者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也。」と説示されていることには重要な意義がある。

（四）浄土建立の意義

『大經』に法蔵菩薩の發願の心を述べて「令我於世速成正覺、拔諸生死勤苦之本」とあるが、その願心の具體的發動が浄土の建立となったのである。これについて『安樂集』には「為欲成就衆生故願取仏国」と述べ、また「法蔵菩薩願成仏在西悲接衆生。」といわれている。浄土建立の意義は、ひとえにあらゆる衆生を成仏せしめるためにほかならない。

（五）無相離念と立相住心

「定善義」第八像觀の釈義によれば、諸師は『觀經』に説かれる法界身を法身とみて、それがあるいは「唯識法身觀」の立場より、または「自性清浄淨仏性觀」の立場よりこれを解釈して、『觀經』の觀法を無相離念の理觀を説くものとみなした。

これに対して、善導大師は『観経』に説かれている観門は末代濁世の凡夫を対機としていたのであって、西方に莊嚴成就された有相の浄土を観察する事観であるとされるのである。従って無相離念の理観に対して、立相住心の事観を述べるのに「指方立相」を説いたのである。もとより指方立相の語句が直接出されるのは観門についてであるが、その語義は広く阿弥陀仏の浄土の特色を説示する言葉として用いられているのである。

ここで説き示される指方立相の浄土こそ、凡夫の成仏のための世界なのである。このことを『法事讃』には「一切仏土皆嚴浄、凡夫乱想恐難生。如来別指西方国。従是超過十万億。七宝莊嚴最為勝。」といわれている。

つまり、指方立相の阿弥陀仏の浄土こそ大乘仏教の究極態としての真空妙有の世界なのである。従って最も勝れた悟りの世界なのである。ここに罪濁の凡夫が、最勝の浄土に往生せしめられる仏道が成就されるのである。

（今年の提要） 2023(令和5)年度 提要

指方立相

【題意】

阿弥陀仏の浄土について、浄土三部経に「西方」と説示される意義と莊嚴相とたてられた仏意を窺う。

【出拠】

「定善義」

【釈名】

「指」「方」「立」「相」

【義相】

一、浄土三部経に「西方」と説く意義（『安樂集』『往生礼讃』前序などの説示）

一、浄土建立の意義（『大経』『安樂集』の説示、法然聖人の説示「浄仏国土成就衆生の願」「平等の大慈に催されて」などの解釈）

一、辺即無辺、相即無相の浄土（『浄土論』『往生論註』などの説示）

一、無相離念と立相住心（「定善義」の説示と、宗祖の観経隠顯釈）

会読案 出拠

『定善義』第八像観 (『聖典全書』一卷745頁) (『註釈版』七祖篇432頁)

今此観門、等唯指方立相、住心而取境。総不明無相離念

またいまこの観門は等しくただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。総じて無相離念を明かさず。

類文

『法事讃』卷上 前行法分 広請三宝 (『聖典全書』一卷807頁) (『註釈版』七祖篇517頁)

但だ凡夫の乱想寄託するに由なきが為の故に、釈迦・諸仏慈悲を捨てずして、直ちに西方十万億刹を指さしむ。国を極楽と名づけ、仏を弥陀と号く。現にましまして説法したまふ。その国清浄にして四徳の莊嚴を具せり。

『法事讃』卷下 転経分 第二段 (『聖典全書』一卷833頁) (『註釈版』七祖篇552頁)

一切の仏土みな嚴浄なれども、凡夫の乱想おそらくは生じがたければ、如来(釈尊)別して西方の国を指したまふ。「これより十万億を超過せり。七宝の莊嚴もつとも勝たり。聖衆人天の寿命長し。仏を弥陀と号す。つねに法を説きたまふ。極楽の衆生障おのづから亡ず」と。

西方を示す経文

『仏説無量寿経』(『聖典全書』一卷32頁) (『註釈版』28頁)

「法蔵菩薩、いますでに成仏して、現に西方にまします。ここを去ること十万億刹なり。その仏の世界をば名づけて安樂といふ」

『同』卷下 靈山現土 (『聖典全書』一卷65頁) (『註釈版』74頁)

ここにおいて阿難起ちて、衣服を整へ、身を正しくし、面を西にして、恭敬し合掌して、五体を地に投げて、無量寿仏を礼したてまつりてまうさく、「世尊、願はくはかの仏・安樂国土、およびもろもろの菩薩・声聞の大衆を見たてまつらん」と。

『観経』

西方極樂国土 西方極樂世界 西方

散善顕行縁 (『聖典全書』一卷80頁) (『註釈版』91頁)

定善示観縁 (『聖典全書』一卷81頁) (『註釈版』92頁)

日観 (『聖典全書』一卷81頁) (『註釈版』93頁)

普観 (『聖典全書』一卷91頁) (『註釈版』106頁)

雜想観 (『聖典全書』一卷91頁) (『註釈版』107頁)

中上品 (『聖典全書』一卷94頁) (『註釈版』111頁)

中中品 (『聖典全書』一卷95頁) (『註釈版』112頁)

中下品 (『聖典全書』一卷95頁) (『註釈版』113頁)

『小経』 (『聖典全書』一卷105頁) (『註釈版』121頁)

「これより西方に、十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極樂といふ。その土に仏まします、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。

釈名

釋尊に約す

指示 指示（ゆびさししめす）・明示

方処 西方という特定の方処・浄土のあり場所を

弁立 説きあらわす

相状 浄土の莊嚴の事相を

弥陀に約す

指定 指し定める

方処 娑婆から言って西方という方処

建立 建立された

相状 浄土の諸の莊嚴事相を

文証

『安樂集』第六大門 十方西方比校（『聖典全書』一卷631頁）（『註釈版』七祖篇269頁）

二には『大經』（上・意）によるに、「法藏菩薩因中に世饒王仏の所において、つぶさに弘願を発してもろもろの浄土を取りたまふ。時に仏、ために二百一十億の諸仏刹土の天・人の善惡、国土の精粗を説きて、ことごとく現じてこれを与へたまふ。時に法藏菩薩願じて西方を取りて成仏したまひ、いま現にかしこにまします」

『安樂集』第六大門 義推（『聖典全書』一卷632頁）（『註釈版』七祖篇270頁）

このゆゑに法藏菩薩願じて成仏し、西にありて衆生を悲接したまふ。

Q 立相の反対語は？

A 無相

指方 西方という特定の方処を指して、そこに極樂ありと説くこと

立相 極樂が無相離念の世界では無く、

有相の浄土（三嚴二十九種の莊嚴相）であることを説く

義相 一、浄土三部経に「西方」と説く意義

(『安樂集』『往生礼讃』前序などの説示)

『安樂集』

Q 西方の意義如何。

A すべてのいのちが趣入すべき所を

Q 文証如何

A 『安樂集』卷下 第六大門 義推(『聖典全書』一卷633頁)(『註釈版』七祖篇270頁)

問ひていはく、なんがゆゑぞかならず面を西に向かへて坐して礼・念・観するを須ゐる。答へていはく、閻浮提には、日の出づる処を生と名づけ、没する処を死と名づくといふをもつて、死地によるに神明の趣入その相助便なり。このゆゑに法蔵菩薩願じて成仏し、西にありて衆生を悲接したまふ。

東 日出処 生

← 神明の趣入 閻浮提

西 日没処 死

Q 日はどうして西へ行くのか。

A 一切諸天人民を阿弥陀仏を稽首せるために、日月星辰二十八宿は西へ行く。

(文証)『同』(『聖典全書』一卷633頁)(『註釈版』七祖篇271頁)

〈日・月・星辰二十八宿の西に行く所以は、一切の諸天・人民ことごとくともに阿弥陀仏を稽首したてまつれ〉となり。ここをもつて日・月・星辰みなことごとく心を傾けてかしこに向かふ。ゆゑに西に流る

『往生礼讃』前序 (『聖典全書』一卷915頁)(『註釈版』七祖篇658頁)

また『観経』にのたまふがごとし。仏、坐観・礼念等、みな面を西方に向かふるを須ゐるは最勝なりと勧めたまふ。樹の先より傾けるは倒るるに、かならず曲れるに随ふがごとくなるがゆゑなり。かならず事の礙ありて西方に向かふに及ばずは、ただ西に向かふ想をなすもまた得たり。

問ひていはく、一切の諸仏三身同じく証し、悲智の果円かにしてまた無二なるべし。方に随ひて一仏を礼念し課称せんに、また生ずることを得べし。なんがゆゑぞ、ひとへに西方を歎じて、勧めて礼念等をもつばらにせしむるは、なんの義かあるや。

答へていはく、諸仏の所証は平等にしてこれ一なれども、もし願行をもつて来し収むるに因縁なきにあらず。しかるに弥陀世尊、本深重の誓願を発して、光明・名号をもつて十方を摂化したまふ。ただ信心をもつて求念すれば、上一形を尽し下十声・一声等に至るまで、仏願力をもつて易く往生を得。このゆゑに釈迦および諸仏勧めて西方に向かはしむるを別異となすのみ。またこれ余仏を称念して障を除き、罪を滅することあたはざるにはあらず、知るべし。

『観経』日想観

(梯實圓和上 『聖典セミナー』『観経』133頁)

善導大師によれば、日想観をおこなうには、春分と秋分のころが最適であるといわれています。太陽が真東から昇って、真西に沈むからで、その沈みゆく太陽を心に想いえがいていくわけです。極楽浄土を観想するのに、まず落日を見よと教えられたのには三つの意味があります。

第一は、極楽の方処が西方であることを知らせて、心を西方の一点に集中させるためです。定善観法をするためには、心が散乱しないように精神を統一することがなによりも大切ですので、まず極楽浄土は、太陽が沈んでいく真西の方向に実在すると思いつて、そこに心を集中させるわけです。したがって日想観をするためには、西の方が開けた場所で、落日がよく見える静かなところに道場をつくる必要があります。

第二に日想観するのは、自身の罪障の軽重を知るためです。太陽を心に想い浮かべようとして瞑想を行っているうちに、硬貨ほどの大きさの太陽を想い浮かべることができるようになります。しかしその太陽は、薄い黒雲がおおうような状態であったり、黄雲がおおうような姿であったり、白雲がかかったようなありさまであったりします。これを黒障、黄障、白障といい、行者の罪障が重いと黒障が、やや重いと黄障が、軽い場合は白障が出てくるといわれています。このような罪障があるかぎり、どんなに励んでみても、浄土や如来を観想することができません。そこで行者は道場を莊嚴し、仏像を安置して、阿弥陀仏を始め一切の諸仏、菩薩および一切の衆生に向かつて、自分が無始以来造ってきたにちがいない十悪、五逆、謗法といった罪障を一つひとつ数えあげて告白し、全身を大地にひれ伏してその申し訳なさをあやまります。これを懺悔といいますが、懺悔しおわるとまた再び結跏趺坐（左右の足の甲を、それぞれ反対の足の股のつけ根にあげ、足の裏が上をむくように結み、左右の足のひらを重ね、親指同士を向かいあわせて左足の上におく坐りかた）をして瞑想にはいつていきます。もし罪障が残っておれば、三障があらわれますから、再び懺悔を行います。しかし罪障が消えているならば、眼を閉じていても開いても、燦然と輝く太陽があらわれてくるといわれています。

さて第三に日想観をするのは、この世で一ばん明るく輝く太陽をとおして、極楽浄土には暗い影は全くなく、内外ともに光明に満たされた、朗然として明浄な世界であることを知らせるためであるといわれています。こうして落日を観ずることによって、極楽浄土を観ずる心の準備がととのえられていくわけです。

二、浄土建立の意義

（『大経』『安樂集』の説示、法然聖人の説示「浄仏国土成就衆生の願」「平等の大慈に催されて」などの解釈）

Q 浄土建立の場所について、どのような意義があるか？

A 勝易の二徳をうかがう。

（最勝）

Q 『大経』には浄土はどこにあると説かれているか。

A 西方 去此十万億刹

『仏説無量寿経』（『聖典全書』一卷32頁）（『註釈版』28頁）

「法蔵菩薩、いますでに成仏して、現に西方にまします。ここを去ること十万億刹なり。その仏の世界をば名づけて安樂といふ」

Q 「去此十万億刹」の所顕如何

A 彼此が隔たっていることによって最勝なることを顕す。

『安樂集』第六大門 十方西方比校（『聖典全書』一卷63頁）（『註釈版』七祖篇269頁）

『大経』の意を引文して

「法蔵菩薩因中に世饒王仏の所において、つぶさに弘願を発してもろもろの浄土を取りたまふ。時に仏、ために二百一十億の諸仏刹土の天・人の善惡、国土の精粗を説きて、ことごとく現じてこれを与へたまふ。時に法蔵菩薩願じて西方を取りて成仏したまひ、いま現にかしこにまします」

とし、632頁以下

ゆゑに知りぬ、もろもろの浄土のなかに安樂世界は最勝なり。

（易入）

Q 十方世界にどこでも浄土はあるだろうに、どうして阿弥陀仏は西方と示したのか。

A 娑婆世界から往生が甚だ便であるから。

Q 理由如何

A ①十方は寛くて、凡夫は心味く、境狭きゆゑに專一にできないから西方と示した

②西方は浄土の初門である。

③娑婆は穢土の末処である。

だから、境次相接している。

（文証）

『安樂集』第二大門 破異見邪執 第八校量願生十方浄土、不如歸西方（『聖典全書』一卷596頁）（『註釈版』七祖篇217頁）

①境寛ければすなはち心味く、境狭ければすなはち意もつばらなり。

②二には十方の浄土みなこれ浄にして深淺知りがたしといへども、弥陀の浄国はすなはちこれ浄土の初門なり。

③娑婆世界はすなはち穢土の末処なり。

山本仏骨和上『道綽教学の研究』364頁

而して勝易二徳は安樂浄土の真面目であつて離れたものではない。然るに或時は勝を隠して易を現じ、或時は易を隠して勝を現じ、或時は勝易二徳を具現して、随機の摂化を行われるのである。斯くて道綽は易入の面を他経に依つて境次相接と示し、超勝の面を『大経』に依つて法蔵発願の淵源から示されたものと理解せねばならない。而して仏土の絶対不可思議からいえば、初後不二、遠近不二であつて、境次相接というも実義なれば、過十萬億仏土というも実義であつて、差別妄執の分別を超えているものと考えねばならない。

参照 安藤光慈和上「指方立相について」(印度学仏教学研究第三十八号第二号159頁)

Q 經典に西方と説示される意図如何。

A 阿弥陀仏と浄土が現に実在していることを説き示す。

Q 根拠如何。

A 「西方」 方処の限定

「過十萬億仏土」 距離の限定

「名曰安樂(極樂)」 名称の限定

を同時に示すことによって具体的に現実在を示す。

Q 「具体的な現実在」とは？

A 相対分別の衆生の認識に依じている。それ以外に衆生に認識され得ない。

Q 相対分別の領域ならば、仏智とはいえない。如何。

A 相対分別の言語でしか認識され得ないが、その内容は「西方去此十萬億刹」と示し、無量の距離を示すことによって、娑婆世界の相対を超えた絶対性を認識せしめている。

『和語灯録』巻一 三部経釈(『聖典全書』六卷400頁)

Q 法蔵菩薩の浄土建立の意趣如何。

A 四十八願は「浄仏国土・成就衆生の願」であり、諸菩薩の本意は下化衆生である。

『和語灯録』巻一 三部経釈(『聖典全書』六卷401頁)

しかれば、ただ本意は下化衆生の願にあり。いま弥陀如来の国土を成就し給ふも、衆生を引接せんがためなり。

Q 本願はどのような衆生を対象としているか。

A 一切を摂せんがために。

『選択集』本願章(『聖典全書』一巻1273頁)(『註釈版』七祖篇1210頁)

法蔵菩薩の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を摂せむがために、造像起塔等の諸行を以て往生の本願としたまはず。唯称名念仏一行を以て其の本願としたまへる也。

三、辺即無辺、相即無相の浄土

(『浄土論』『往生論註』などの説示)

Q 『浄土論』では浄土をどのようなところだと示しているか。

A 『聖典全書』一卷433頁)(『註釈版』七祖篇29頁)

究竟して虚空の如く、廣大にして辺際なし。

Q 西方とは辺際があることで、矛盾するじゃないか。

A 辺(西方)、無辺の両義が実義である。

Q 辺際がある、辺際がない、両立しないじゃないか。どういう意味か？

A 一即一切。一切即一。

Q 一とは？ 一切とは？

A 一が一切に縁って起こっているので、一一に一切の徳を具えている。

辺が無辺に ヌ

辺に 無辺の徳を摂めてある。

こういう正縁起の世界を「蓮華蔵世界」という。

Q 蓮華蔵世界とは何か。

A 『華嚴經探玄記』法蔵 (T 35.152a)

問 下の文、此の華蔵界は無邊なり。云何が此の中に東等有りや。

答 華蔵界は是れ邊無邊不二を以ての故に無邊と名く。下の説の如し。

無邊邊不二の故に有邊と名く。此の説の如し。

是則ち邊を壊せず而、恒に無邊なり。

無邊を破せず而、恒に邊なり。

若し無邊は邊に乖き、邊は無邊に乖くと謂わば、是情計所及法なり。正縁起に非ざる也。

此の邊・無邊、是の一事を以ての故に、雙べて情計を越ゆる也。

Q 今の文によって華嚴の蓮華蔵世界が正縁起だから辺・無辺であることはわかる。

阿弥陀仏の浄土が辺・無辺であることの文証にならない。如何。

A

『浄土論』願事成就(『聖典全書』一卷443頁)(『註釈版』七祖篇41頁)

入第三門とは、一心専念にかしこに生ぜんと作願し、奢摩他寂靜三昧の行を修するをもつてのゆゑに、蓮華蔵世界に入ることを得。これを入第三門と名づく。

『論註』上 性功德(『聖典全書』一卷458頁)(『註釈版』七祖篇60頁)

「性」はこれ本の義なり。いふところは、この浄土は法性に随順して法本に乖かず。

事、『華嚴經』の宝王如来の性起の義に同じ。

「正信偈」天親章

得至蓮華蔵世界

Q 阿弥陀仏の浄土は、華嚴の浄土と同じか？

A 異なる。華嚴は仏の自境界。弥陀浄土は生仏一如の境界。

■【参考】『論註』 法界身・入一切衆生心想中・是心作仏是心是仏

Q 論註の法界身義の文を挙げよ。

A 卷上 觀察門 衆生世間 仏 身業功德積

（『聖典全書』一卷474頁）（『註釈版』七祖篇8頁）

問ひていはく、『観無量寿経』にのたまはく、「諸仏如来はこれ法界身なり。一切衆生の心想のうちに入る。このゆゑに、なんぢら心に仏を想ふ時、この心すなはちこれ三十二相・八十随形好なり。この心作仏す。この心これ仏なり。諸仏正遍知海は心想より生ず」と。この義いかん。答へていはく、「身」を集成と名づく。「界」を事別と名づく。眼界のごときは根・色・空・明・作意の

P・82

五の因縁によりて生ずるを名づけて眼界となす。これ眼ただみづからおのが縁を行じて他縁を行ぜず。事別なるをもつてのゆゑなり。耳・鼻等の界もまたかくのごとし。「諸仏如来はこれ法界身なり」といふは、「法界」はこれ衆生の心法なり。心よく世間・出世間の一切諸法を生ずるをもつてのゆゑに、心を名づけて法界となす。法界よくもろもろの如来の相好の身を生ず。また色等のよく眼識を生ずるがごとし。このゆゑに仏身を法界身と名づく。この身、他の縁を行ぜず。このゆゑに「一切衆生の心想のうちに入る」となり。「心に仏を想ふ時、この心すなはちこれ三十二相・八十随形好なり」といふは、衆生の心に仏を想ふ時に当りて、仏身の相好、衆生の心中に顕現するなり。たとへば水清ければすなはち色像現ず、水と像と一ならず異ならざるがごとし。ゆゑに仏の相好の身すなはちこれ心想とのたまへるなり。「この心作仏す」といふは、心よく仏を作るといふなり。「この心これ仏」といふは、心のほかに仏ましまさず。たとへば火は木より出でて、火、木を離るることを得ず。木を離れざるをもつてのゆゑにすなはちよく木を焼く。木、火のために焼かれて、木すなはち火となるがごとし。「諸仏正遍知海は心想より生ず」といふは、「正遍知」と

P・83

は真正に法界のごとくにして知るなり。法界無相なるがゆゑに諸仏は無知なり。無知をもつてのゆゑに知らざるはなし。無知にして知るはこれ正遍知なり。この知、深広にして測量すべからず。ゆゑに海に譬ふ。

Q 「諸仏如来は法界身、入一切衆生心想中」の文意如何。

A 仏身の相好身は衆生の心想・意識界のみに認識されるような身業功德であること。

Q 「法界」とは？

A 「衆生の心法」

Q 衆生の心と法の関係如何

A 心は一切諸法を生ずる。

Q 一切諸法とは如何。

A すべての存在。

Q すべての存在を何によって認識するのか？

A 眼耳鼻舌身意の六根（知覚機能）六識（認識主体）。
Q それぞれの認識対象は何？
A 色声香味触法。
Q 法境を認識する根・識は何か
A 意根意識。
Q 論註の文「界を事別と名づく」文意如何。
A 界の字義は「境界」というように、区切りを付けて分けたさかいをあらわす。眼界には色が認識対象である様に、眼耳鼻舌身意のそれぞれに色声香味触法が認識対象となっている。その対応関係が入り混ざることがないことを「事別」と云い、「他の縁を行ぜず」と云っている。

Q 「身」とは？

A 「仏の相好の身」

Q 論註の文「身を集成と名づく」の文意如何。

A 身は集まり成ったもの。

Q 何が集まったのか。

A 人の身は眼根など多法の集まった所を身根という。

『大乘法苑義林章 第三本 T45, 298b

「身者積聚義 依止義 雖諸根大造竝皆積集 身根爲彼多法依止 積集其中 獨得身稱」

（身とは積聚の義 依止の義なり。諸根の大造とは並に皆積集なりと雖も 身根は彼の多法の依止となり。其の中に積集すれば独り身の称を得）

Q 仏身は何が集まっているのか。

A 觀經では「三十二相・八十随形好」といい、論註では「莊嚴身業功德成就」といわれるように功德（すばらしさ）が集まって成っておるのが仏身である。

Q 「入一切衆生心想中」はどういう状況か。

A 仏の相好功德が、衆生の觀相心のみにはたらくことをいう。

Q 「心想仏時、是心即是三十二相八十随形好。」の文意如何。

A 仏の相好身と衆生の心想が不一にして不異。

Q 不一にして不異とは解しがたし。

A 清い水面に色像が映るとき、その像と水とは一つではないが異ならない。

Q 「是心作仏、是心是仏」の文意如何。

A 心が仏を作り、心が仏になることを木と火の譬をもって示される。

Q 木と火は何を指すか。

A 木が衆生の心想、火が仏の相好。

Q 木と火の譬えに当てはめて説明せよ。

A 仏身は衆生の心想より出でて、仏は衆生を離れない。火が木を離れず焼いて、木が火となる様に、衆生の心が仏となる。

四、無相離念と立相住心

(「定善義」の説示と、宗祖の観経隠顕釈)

諸師の無相離念

Q 出扱の文を読め。

A

『定善義』第八像観 (『聖典全書』一卷745頁) (『註釈版』七祖篇432頁)

今此観門、等唯指方立相、住心而取境。総不明無相離念

またいまこの観門は等しくただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。総じて無相離念を明かさず。

Q 無相離念とは？

A 法界身

無相の法身、法界真如の理

是心作仏是心是仏

自性清浄心、即ち仏性を体得する観法

是心作仏

衆生心が理仏を具えてそのまま仏となること

是心是仏

衆生心そのまま仏となるならば、心の他に仏はない

浄影寺慧遠『観経義疏』 (T三七卷 180頁) 是心作仏 始学名作 己の当果に望んで 彼に生ずるを観ずる 由って心作仏と名く。	聖典セミナー『観経』 梯實圓和上 182頁 どんなに濁っていても水の本体は清浄なわけですから、浄化さえすれば本来の症状を回復するように、懺悔し、滅罪して、観仏の修行をおこなえば、心の濁りが浄化され、心は本来の清浄な法身にかえる
是心是仏 終成即是 諸仏法身と己とは同体を現ず。 仏を観ずる時、心中に現ずるは 即是諸仏法身の体	法身とは、仏の無分別智によって悟られている不生不滅の法(真如・法性)のことで、衆生の煩惱の心も、その本性は清浄な法身真如そのものである

嘉祥寺吉蔵『観経義疏』 (T三七卷 243) 法身佛者文云如來是法界身。即是法身。 一切皆是法界一切皆是法身。故前作此想也。 次云是心即是三十二相八十種好。 是心作佛是心是佛。凡有三。所以明三 是者。明此三是義足 是心即是。三十二相即是應身。 是心是佛即是法身。 是心作佛即明二身因也。	聖典セミナー『観経』梯實圓和上 182頁 法界身とは仏の法身のことであるといっていますから、基本的には慧遠大師と同じ考えでした。
---	--

聖典セミナー『観経』梯實圓和上182頁

いずれにしても、法界身とは諸仏の本性であると同時に、一切の衆生の心の本性でもある「真如・法性」そのもののことで、それを仏のがわでいえば、法身といい、衆生のうえでいえば、心の本性である本来清浄な仏性（如来蔵）のことである、と解釈されたわけです。こういう考え方は中国でも日本でも広く行われ、阿弥陀仏といっても浄土といっても我が心の本性をいうので、本来我が心の中にあるといい、「唯心の弥陀」とか「己心の浄土」などと主張したものでした。

Q 浄影の法界身義所顕如何

A 1. 修行の重要性

懺悔し観仏の修行すれば、浄化されて本来の清浄法身となる

2. 観によって仏果を完成する必然性

行者は仏道成就への確信を持つて修行することができる

善導大師の立相住心

Q 善導大師の観経十六観の扱い方如何。

A 前十三観は定善。後の三観は散善をあかす。

Q 十六観法は誰のために説かれたものか。

A 未来世一切の常没の衆生。

「玄義分」和会門 出文顕証（『聖典全書』一卷67頁）（『註釈版』七祖篇32頁）

如来この十六観の法を説きたまふは、ただ常没の衆生のためにして、大小の聖のためにせずといふことを証明す。

Q 常没の衆生に観想ができるわけがないじゃないか。

A しっかり。無色無形の法身を観想することは凡夫に不可能である。ゆえに指方立相の観を与えたのだ。

Q 指方とは？

A 西方という方処を釈尊は指示し阿弥陀仏は指定された。

Q 立相とは？

A 弁立・相状ということで、有相の浄土の莊嚴相、仏の三十二相を説き示したこと。

Q なぜ有相を示すのか？

A 常没の衆生に浄土や如来を知らせ、往生を願わせるため。

（定善義像観一、五一九）

今此の観門は等しく唯だ方を指し相を立てて、心を住せしめて境を取らしむ。

「定善義」 法界身の釈名

Q 法界身の釈名如何。

A 法界 所化の境 衆生界 能化の身 諸仏の身
（法界を意識の対象とすることを転じた）

法界身 衆生界を化益する仏身

「定善義」 入一切衆生心想中と真身觀三縁との関係

Q 「諸仏如来」より下「心想中」の所顯は？

A まさしく諸仏の大慈、心に応じて

すなはち現じたまふことを明かす

Q どうして心に現ずることができるのか。

A 諸仏如来は法界身だからです。

Q 法界身だったらどうして「心のうちに入りて現」ずることができるのか？

A 法界身には

心遍

身遍

無障碍遍

の義があるから。

Q 説明せよ。仏身が衆生界を化益する模様如何。

A 心遍身遍無障碍遍。

心 大悲心

御心が十方一切の上に普くゆきわたっている

身 無量功德身

如来は心身一如なので、心の遍ずる所、身もゆきわたっている

無障碍 遍じ方

救済活動されるのに何のさわりもない

Q 「入一切衆生心想中」の文意如何。

A 仏身が心も身も障りなく遍満しているから、衆生が心に仏を想う時、三十二相八十随形好を現して下さる。

Q 法界身は觀想する衆生のみに遍満し、感得しうるのか？

A 觀想に堪えられない衆生にも心遍身遍無障碍遍というはたらきがゆきわたっている。

Q 遍くゆきわたっているのはどんな心か

A 念仏衆生摂取不捨という大慈悲心。

Q なぜそんなことがいえるか。

A 「心遍身遍無障碍遍」は真身觀の摂取の三縁と同じ内容で対応している。

親縁 衆生憶念すれば仏も憶念

近縁 御身が目前に現ずる

増上縁 諸邪業繫もよく礙ふるものなし

Q 法界身釈の所顯如何

A 念仏衆生摂取不捨という仏身のはたらきをあらわす。

Q どのように衆生にゆきわたっているのか？

A 念仏衆生摂取不捨。

平成五年專精舎論題「彼此三業 判決より
義相

① 『定善義』の親縁積の意味

『定善義』に『觀經 真身觀の「念佛衆生攝取不捨のいわれをあらわすについて、念佛の衆生のみが「攝取の益をこうむるのは、念佛者と阿弥陀佛との間には親縁 近縁 増上縁といわれる特別な関係があるからである」とい、その親縁を積して、彼此の三業の不離を明かされる。すなわち念佛の衆生は、身口意の三業をもち、常に佛を称礼念するが、佛はそれに応じて常に聞見知したまひ、生佛の三業が不離の関係にあることを攝取不捨というのである。

ところで衆生の称礼念は、佛の大悲を憶念する信心に統られ、如来の聞見知は、衆生を愍念し憶念する大悲心に統られる。そのことを「衆生憶念佛者佛亦憶念衆生」といわれたのである。すなわち衆生の称礼念は、佛の大悲心を憶念する信心から顕発する相続の起行であって、かかる衆生を大悲心をもって憶念しつつ聞見知していられるのが阿弥陀佛であるから、念佛の衆生と阿弥陀佛とは「彼此三業不離」といわれるような親昵なる関係にあることを「念佛衆生攝取不捨」といっているのである。

なおこの攝取の三縁積は、像觀初めの法界身積の心遍 身遍 無障碍遍の三遍の義と順次に対応しており、親縁は第一の心遍の義を開いたものといえよう。この親縁積は『選択集』二行章の親疎対の積下に引積されるが今は略する。

「化身土巻」 観門の扱い

Q 善導大師は観門について、無相離念にあらず、指方立相住心なりと示された。宗祖はどういう扱いか？

A 無相離念も指方立相住心も常没の凡愚には不堪の方便法である。

「化身土文類」三経隠顕（『聖典全書』二巻頁）（『註釈版』393頁）
（機の堪不堪）

【34】宗師（善導）の意によるに、「心によりて勝行を起せり。門八万四千に余れり。漸・頓すなはちおのおの所宜に称^{かな}へり。縁に随ふものすなはちみな解脱を蒙る」（玄義分）といへり。しかるに

常没の凡愚、

定心修しがたし、息慮凝心のゆゑに。

散心行じがたし、廃悪修善のゆゑに。

ここをもつて立相住心なほ成じがたきがゆゑに、

「たとひ千年の寿を尽すとも、法眼いまだかつて開けず」（定善義）といへり。

いかにいはんや

無相離念まことに獲がたし。

ゆゑに、「如来はるかに末代罪濁の凡夫を知ろしめして、

相を立て心を住すとも、なほ得ることあたはじと。いかにいはんや、相を離れて事を

求めば、術通なき人の空に居て舍を立てんがごときなり」（同）といへり。

（法の権実）

「門余」といふは、「門」はすなはち八万四千の仮門なり、「余」はすなはち本願一乗海なり。

Q 本願一乗海に入った上で観門を見直せば、念仏を開いた観門とらないか？

観門を行ずることがそのまま念仏を行じているということにならないか？

A 開会にあらず。廃立である。

以上。何かお気づきの点がありましたらお知らせ下さい。

〒五九九一八一二五

大阪府堺市東区西野521 旭照寺

山上正尊

senjakuhongan@gmail.com

東海から行けそんな領解文学習会

【岐阜】5/18 領解文に学ぶ

■日時：5/18（木）15:00～17

■会場：本願寺岐阜別院（地図）

■講師：武田一真和上

■参加費：喜捨

■問合せ：圓勝寺 info@ensyoji.jp

【三重】6/22「新しい領解文」について

■日時：6/22（木）13:30～16:30

■会場：朝明組 光輪寺（地図）

■講師：内藤昭文和上・安藤光慈和上

■参加費：同行・他組1,000円

■お問合せ： muneaki@m2.cty.net.ne.jp

※申込み締切り5/31（水）

東海教区朝明組＋桑名組合同研修会

【大阪】6/26 新・領解文を学ぶ

■日時：6/26（月）15:00

■会場：蓮浄寺（地図）

■講師：山上正尊師

■参加費 500円／定員10名

■主催：大阪教区河中南組

〓申込みフォーム <https://forms.gle/mwMns1DurLHJkxGr8>

【愛知】9/6『領解文』を学ぶ

ー東海教区額田組仏教講習会ー

■日程：9/6（水）7（木）

09:30《僧侶対象研修会》

13:00《門信徒講習会》

■会場：本願寺三河別院（地図）

■講師：山上正尊師

■申込み：不要

■会費：任意の懇志

■問い合わせ先 高梨顕浄 kokokusan.seirinji@gmail.com

■主催：東海教区額田組